ある落日

井上靖

ある落日

〈井上靖小説全集19〉

昭和49年9月15日印刷
昭和49年9月20日発行

定価 650円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者 井上靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話・業務部(〇三)二六六一五一一一、編集部(〇三)二六六一五四一一 郵便番号・一六二 振替・東京八〇八
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

装画　加山又造

目次

ある落日　三三六
暗い舞踏会　三五二
レモンと蜂蜜　三六五
夏草　三七七
孤猿　三八四
波の音　三九六
ある旅行　四一〇
司戸若雄年譜　四一八
良夜　四三〇
トランプ占い　四四六
屋上　四五六
夏の終り　四六五
自作解題

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上靖小説全集　第19巻

ある落日

一　章

箕原信次は先刻から自動車の料金を表示するメーターの音が気になっていた。カチャッという音と共に二十円ずつ跳ね上がる。銀座から世田谷までだから、五百円とみてそれで充分な筈であったのが、目的地と目される地点に着いてから肝心の南陽アパートというのが見当らず、ぐるぐる廻っているうちに百円ほど予定額を超過している。

箕原は金が惜しいわけではなかった。仕事で使う金だから幾らでも会社に請求できる。自分の腹が痛むわけではなかったが、ただ無駄な金を費すことが厭なだけである。箕原は時々自分の月給も考えず、靴とかマフラーとか服飾に関する方面にとんでもない金を使うが、これは彼に於ては無駄遣いのうちにははいらない。自分の気に入った上等のものを身に着けることで絶えず精神は何ものかを享受している。投入したもとでだけはちゃんと取り返している積りである。

自動車はそのアパートの目印として教えられた極東第一撮影所の前に、何度目かに戻って来た。

「こんどはどっちへ行ってみましょう」

バック・ミラーの中の中年の運転手の顔が箕原信次の方を見た。

「相当大きいアパートだと思うんだがな。もう一度どこかで訊いてみてくれないか。確かに極東第一撮影所の傍だと言ったんだ」

「傍なんですね」

そう念を押されると箕原も自信が持てなかった。

「よし、じゃこんどはそこから左の方へ曲がって行って、大きい建物があったら、そこで訊いて貰おうか」

これで見付からなかったら残念だが帰るより仕方がない。くるまは畑と小さい疎林と、そして低い丘とが交互に置かれてある武蔵野の一部を再び走り出した。花曇りというのか空はどんよりと曇っている。それぞれ五、六十坪の庭を持った中流住宅のいずれもが申し合わせたように一、二本の桜樹を持っていて、七分咲きの花を見せている。

「一年に三日か四日しか花を見られない桜の樹を自分の家

の庭に持ちたがるうちは、日本人も駄目だな」
　箕原は言った。運転手はまだ三十になるかならないくせに小生意気なことを言う身だしなみのいい青年の方に、
「でもいいですよ、やっぱり、桜は」
　と言った。多少反撥的だった。
「桜の花はきれいさ。だけど、桜という奴は公園にでも沢山植えてそれを観るべき性質のものだろうね。花をつけていない時はちっともいい樹じゃない。毛虫はつくし、恰好もよくないし、面白みもない。普通の住宅の庭へ植えるというものじゃないよ、君」
　箕原が言うと、
「そうですかね。でも、やっぱり無いよりあった方がいいですよ。居ながらにして花見ができるんですからね。わたしらんとこみたいに庭もないときちゃあ、植えようったって植えることもできませんがね」
　運転手はそこまで言いかけて、
「あれ、あそこじゃないですかね、何だかアパートみたいな形をして居ますよ」
「どこに？」
「ほら、ずっと右手の方に桜の花が固まって咲いてるでしょう。その向うに四角な建物が幾つか見えますよ」
　なるほど、人家と森のある低地を隔てて遙か前方の右手の方に白いコンクリートの建物が二つ三つ固まって見える。その辺一帯は幾らか周囲より地盤が高くなっているようである。花曇りのはっきりしない空の下に、桜の花が建物の大部分を匿してしまっている。くるまはその建物を目当てに、最近完成されたらしい田野のまん中を貫いているかなり広い舗装道路を走った。
「確かにアパートらしいですよ」
「そうらしいね」
　アパートの全景が見えて来ると、箕原はこれだけの見透しのきく平原のまん中に建てるからには、やはりこの散漫な風景の中にあって、それを引き緊める色と形を持つ建物でなければならぬと思った。箕原信次の頭の中にすぐ描き出されたものは、ちょっと他人には理解されにくい特殊な形であった。てっとり早く言うとピラミッドである。ピラミッド型の建物以外この平原に於て美しさを確保できるものはなさそうだ。
　色の方は熱帯魚の中から適当なものが見付かるだろう。青い藻の間をひらひらと游泳する小さい魚の持つ幾つかの色が箕原の眼に浮かんで来た。
　くるまが停まった。運転手は降りて行ったが、やがて戻って来ると、
「やっぱりここですよ」

と言った。メーターは六百八十円を示している。

くるまを返すと、信次は四階建のアパートを見上げた。そして、先ず一番手前の入口からその各階に住む住人の名札を見て行った。四階だから左右二軒ずつ八軒分の住居人の名が一つの入口に掲げられてある。最後の四つ目の入口で、箕原は、四〇八号室、三名部清子と書かれた名札を発見した。

箕原信次は階段を上り出した。各階の途中に狭い踊り場があって、そこで階段は折返している。足音がやたらに大きく響く建物である。各階毎に、そこに上ったところに、二つの入口の扉が向かい合って付けられてある。

箕原は四階まで上ると、その目的の部屋の前を通り越して更に上へ上って行った。屋上はがらんとしていて、一隅に夥しい洗濯物が翻っている。特に非難すべき点も見当らないが、何といっても、全体的に退屈で安易である。大体現在のところアパート建築というものは、一応固定した規模と形態とを持っている。エレベーターが要らぬ限りの高さに於てはこうするより仕方がないであろう。問題は別のところにある。こうした四階建の小規模のアパート群を見る度に箕原の思うことは、これらを一つの塔状のものに集約したらどうだろうかということだ。アパートに限らず、住居群を立体的に集約することは、時代の課題なのである。

箕原は一階下へ下りると、そこで四〇八号室の扉を叩いた。暫く立っていたが誰も出て来る様子はなかった。扉越しにラジオかレコードの音が聞えている。見廻したところ呼鈴もないので、箕原はもう一度ノックした。しかし、依然として人の出て来る気配はなかった。箕原は郵便受の口の蓋を押しやって、

「ごめんください」

と、大きな声を出した。その時初めて内部から返答があった。そして間もなく扉にくっつけられてある覗き窓の覆いが上がった。訪問者が誰であるかを知るためである。

箕原はこの愚劣な装置を目の前に見せられて、少し興醒める気持だった。覗き窓によって、訪問者が最初に受け取るのは、露骨に示された相手の警戒心ではないか。問題は付ける場所である。

「どうぞ」

扉が開けられて、二十六、七の若い女が顔を出した。

「すぐお判りになりました?」

三名部清子は少し固い感じで言った。

「大分探しました。撮影所の近くだと伺ったのであの付近を——」

箕原が言いかけると、

「まあ、そんなこと申しませんでしたわ。撮影所の前の通

りにお出になったらいけませんと申し上げたんですのに」
「そうでしたかね。それじゃ判らない筈だ」
「あの時、よくお判りになったと思いましたわ。地図もお書きしました」
「それが、洗濯屋に持って行かれちゃいましてね、洋服と一緒に」
　箕原は畳一枚ほどの土間に靴を脱いで内部へはいると、先ず不遠慮に室内を見廻した。靴脱ぎとの間に半間程の板敷を挟んで突当りに四畳半の部屋があり、それに続いて六畳の部屋がある。玄関の左手に台所と浴室、右手に便所がある。
　箕原は、自分が住んでいたらおそらく圧迫を感ずるであろう低い天井と、真白に塗りたてられた壁に囲まれた室内をもう一度丹念に見廻すと、南のベランダに近い一隅に置かれたただ一つの籐椅子に腰を降ろした。
「どうぞ」
　三名部清子は部屋のまん中に座蒲団を出して、そこに坐るように勧めたが、訪問者は椅子から離れようとしなかった。坐ることによって、ズボンの膝が飛び出すことを恐れたからである。
「一応プランだけは作ってみました。勿論気にいらないところがあったら、遠慮なくおっしゃって戴いて結構です。どうせ最後的な決定をみるまでには、何回か検討してみなければならないと思います」
　箕原信次は言うと、先刻から右手に丸めて持っていた図面を、坐っている清子に手渡し、自分は煙草に火を点けた。そして、
「灰皿ありませんか」
　と言った。清子は台所へ立って行ったが、硝子の皿を持って来ると、
「灰皿がありませんのよ。これにどうぞ」
　と言って、箕原が腰掛けている籐椅子の肱掛けの上に置いた。
　そして清子は図面を持って自分の方から椅子の近くに座を移して来た。清子は四、五枚重ねてある図面の一枚に眼を当てていたが、
「説明して戴かないと、私にはよく判りませんわ」
　と言った。
「勿論、御説明しますよ」
　ここで初めて箕原は已むなく椅子を降り、畳の上に横坐りに坐った。そして図面を重ねたまま清子の方へ向けて、
「これがおもな部屋です」
「居間ですか」
「居間でも、応接間でも、寝室でもあります。何にでもな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ります」
「まあ、大きなお部屋！　私一人ですのよ」
「承知しています。確かにお一人のお住居ですから要求される機能は一応単純なわけです。しかし、将来考えられるいろいろな複雑な要求にマッチさせるためには、いま小さな限定された部屋を作ることはできません。必要に応じて簡単に区切ることのできるプロポーションのいい部屋を計画しておいて、応接間にも、居間にも、食堂にも、それから炊事にも使うわけです」
「そうすると洋間になるわけですのね」
「そうです」
「わたくし、居間だけは和室にして欲しいって申し上げた筈ですが」
「確かにそう承って居ります。しかし、これからの生活様式は、好むと好まないに拘らず、一切洋式になりますよ。大体和室っていうのは、立ったり坐ったり能率的でない——」
「でも、私、勤め先で一日椅子の生活をして居りますでしょう。やっぱり自分の家へ帰ったら畳の上で長々と足を伸ばしてみたいですわ」
「しかし、畳の上で必ずしも躰は休まりません。立ったり坐ったりだけでも相当なエネルギーを余分に消耗します。殊に若い女の方は、坐る度に坐り胼胝が大きくなる。主要な部屋だけはやはり洋式になさったらいかがです」
　若い建築家は言った。
「戸棚がありませんわ」
「戸棚はありませんが、ここに収納キャビネットを置きます。これはどこへでも動かせます。このために、あとの空間の自由度は非常に高くなります。大体、僕は思うんですが、この収納キャビネット式に、建築の部分品を作って売るような時代が来るのではないかと思います。早い話が、自動車を大量生産のシステムに依らず、注文で一台作ったら非常に高価なものになるでしょう。逆に住宅のようなものを、自動車を作るように大量生産にのるような部分に分けて作ったら、これは非常に安くなります。浴室、洗面所、便所、ガスボイラーが組み合わさって一つの単位、台所は台所で一つの単位。それを買って来て自分の必要な空間の一部に当てはめる」
　それから顔を図面の上に落すと指を動かして、
「これに続いて台所です」
「境がないんですか？」
「なくてもいいと思います。しかし、付けるのでしたら、カーテンでいいでしょう」
「でもお台所の匂いやなんか——」

「それは御心配に及ばないでしょう。匂いは全部外に出してしまいます」
「カーテンだけでは落着きませんわ」
「扉で仕切るともっと落着かないでしょう。次に、これが寝室です。収納キャビネットを移動させることに依って広くも狭くもなる」
「着替部屋は？」
「一応のけました」
「二畳位でいいんですけど、やっぱり着替の部屋が欲しいですわ」
「寝室ではいけませんか」
「ええ、なるべくなら居間の横にちょっと——。鏡台も置きたいし、洋服箪笥や整理箪笥も置かなければ」
「寝室の方に、比較的大きい洋服掛と、下着類のための整理戸棚を拵えました。全部作りつけです」
「じゃあ、この洋服箪笥はどうなるんでしょう」
三名部清子は四畳半の方に置いてある洋服箪笥にちらっと眼を当てた。
「それはまあ、廃止して戴くことになるかも知れませんね。着替なんて寝室で事足りますよ。何なら寝室をもう少し広くしましょうか」
「ベッドも壁に嵌め込みます？」

若い建築家は、幾らか自分に皮肉に聞えた言葉を口から出した相手の顔にちらっと眼を当てた。
三名部清子は話の途中で、コーヒーをいれるために座を立って行った。
その間に箕原は部屋の内部を不遠慮に見廻した。先刻部屋にはいって来た時最初に見渡したのは部屋の造りであったが、こんどは部屋に詰まっている家具調度類が新しい家に持ち運ばれる資格を持つ物かどうかの品定めであった。そしてそれと一緒にそこに住む人間の生活を一応知っておく必要もあった。
設計を依頼された家というのは、二十五坪程の、女一人が住む家である。それにしてもまだ年齢は二十六、七にしか見えない。坪七万とみても最低百七十五万という金が要るわけである。どこに勤めているか判らないが、自分の力で都合できる金額とは思えない。会社によってはそのくらいの金を借りられるところもないとは限らないが、しかし、めったにそんな親切なところはないだろう。と言って、この部屋からは、男の匂いは感じられない。灰皿さえもないではないか。
箕原は先々週の土曜日に初めて自分の会社に訪ねて来た時の三名部清子と、それから十日程を経たいま目の前に居る清子とを較べてみた。最初の時に受けた清純な感じは少

しも変っていない。令嬢タイプでもないが、世間ずれしたところはいささかも感じられない。物腰も言葉遣いもしとやかで丁寧ではあるし、表情の動きも明るくぴちぴちしていて、一応聡明と言える部類に入れてもよさそうである。この女性の裏に一人の男性を想定することも、いまのところでは、箕原には無理のように思われた。

四畳半の方には大きな洋服箪笥と、それに並べて整理箪笥が壁の一方を埋めている。向い側の一間の押入には恐らく寝具類が詰め込まれているのであろう。六畳の方には、隅に坐り机があって、スタンドと、二、三冊の書物、それにペン皿、インクスタンド、小箱といったものが気持いい程きちんと整理されて載っている。一輪挿しには黄色い薔薇の花が二本ささっている。玄関の下駄箱の上にも薔薇があって、その匂いがいきなり鼻をついたのを、箕原はこの時思い出した。

机の横にかなり大きな本箱が二つあるが、これにはカーテンがかかっているので、いかなる書物が並べられてあるか判らない。

それらと反対に、部屋のまん中の円形テーブルを挟んで、台所側にキッチン・キャビネットが置いてある。上半分の透明硝子を通して、紅茶、コーヒーセットとかいったグラス類がぎっしり並んでいるのが見える。台所の棚も整頓していて清潔な感じである。

箕原は自分が頭に描いている新しい住居は、三名部清子という若い女性にとって充分ぴったりしたものに思えた。そこに彼女を置いたら、彼女は水を得た一匹の魚のようにどんなに生き生きとすることであろう。

コーヒーが沸くと清子はポットからコーヒー茶碗にそれを注ぎ、箕原の前に置いた。そして自分の分を注ぎ入れながら、

「トイレットですが、やはりこれは別にして戴きませんと。——お風呂場と一緒は厭なんですもの」

と言った。箕原はそれに答えず、梃でも動くまいとする時いつもそうであるように、煙草を深く吸い込んでふうっと大きく吐き出すと、

「まあ、その問題はあと廻しにしておきましょう」

と言った。清子は暫く黙ってコーヒーを啜っていたが、再び、

「六畳のお部屋ですけど、居間との境はどうなってますでしょう」

と訊いた。

「低い棚か台のようなもので仕切ってあります」

「すると、結局居間と同じお部屋みたいなものですね。居間はずいぶん大きくなりますわ。結局家全体が居間みた

い」
「必要にして充分な空間を先に設定し、それを寝室、居間、そしてその六畳間に区切ったわけです。将来どうにでも変えられますし、お一人の生活ですから、別にそれぞれ他と隔絶する必要もないでしょう」
「それはそうですけど」
「こうした方がずっと明るくなります」
「わたくし、あまり明るいより、少し暗くても落着いた部屋が欲しいですわ。このこと前にも申し上げましたけど」
三名部清子の口調は幾分強くなっていた。
「落着くという点では充分これで落着くと思います」
「それからお玄関ですけど、あら、これで見るとお玄関ありませんわ」
「玄関と言うべきものかどうか判りませんが、入口はあります」
箕原は図面の一部を指し示した。
「いわゆる玄関と称せられるものは僕は取りませんね。権威の象徴とでもいったような玄関はいやですね。僕が一カ所主張を入れて戴きたいところがあるとすれば、それはこの家では玄関です。他はできるだけおっしゃる通りになるように努力しましたから」
「そうでしょうかしら。私には少しもそう思われませんわ」
それから清子は、
「でも、お玄関だけは普通にして戴きたいと思いますわ。わたくしが住む家なんですから」
清子の口調にはこの時初めて必死なものが現われた。
「それはそうです。貴女が住む家なんですから貴女が気に入らないといけない。しかし、日本人というのはとかく従来の風習から脱け出せないものでしてね。今迄ある住宅の様式が本当のものだと思っている。しかし、それは変えないといけませんし、好むと好まないに拘らず変って行くでしょうね」
「これが全部気に入らないというわけではありませんけど、もう一度私の好みやなんか取り入れて、設計し直して戴くわけには行きませんかしら」
清子は改めて言った。
「そうですね。できるかどうか判らないけれど、なるたけお気持に添うように努力してみましょう」
箕原は言った。
「できるかどうか判りませんの？」
「とにかく考えてみましょう。もう十日程したら伺います」
「青写真まで造ってしまわないで、極く大体の間取りの図面を見せて戴いたらよろしいんじゃありません？　こんな

に何枚も勿体ないですわ」
それから三名部清子は訊いた。
「もう何軒もお建てになりました？」
「個人の独立住宅はこれで五軒目です」
箕原は青写真をまるめて輪ゴムでとめると、
「今、競馬場にかかっていて、その方の仕事と平行してやって行きますから、どうしても多少時間を食います。が、できるだけ早くやりましょう」
と言った。
「競馬場!?」
「東北の町の競馬場です」
「面白いでしょうね、そうしたお仕事。競馬場のほかでは？」
「飛行場もやりました。しかし、競馬場はともかく、飛行場は余り面白くはありません。現在の飛行場というものは短い生命だと思うんです。ジェット機時代になるとまるで違ったものになりますからね」
そう言うと、箕原信次は、
「では、十日程してお伺いすることにしましょう。どこへ連絡しましょうか」
「そうですね」
三名部清子はちょっと考えていたが、
「やはり、このアパートへお電話して下さい」
と言った。
箕原信次は三名部清子のもとを辞去して南陽アパートを出ると、一丁程行ったところで、もう一度建物の方を振り返ってみた。
彼は先刻と同様、俺ならどんな建物をここへ建てるだろうかという思いに取り憑かれた。そしてこんど彼の頭へ浮かんで来たプランは初めの時のものとは少し異っていた。先刻はピラミッド型以外、この平原に置くいかなる相応しい形もないと思ったが、いまはそれとは別の形が彼の頭を占領していた。こんどは一つでなく、二つの建物であった。一つは大家族向きの四角なアパートであり、もう一つはその隣に位置する円筒形のアパートである。円筒形の方は、当然そこに収められる部屋が扇形になるので、独身者か、夫婦二人ぐらいのアパートになる。
どちらの建物もさして特異な装飾は要らないだろう。四角な建物の方は、屋上の水槽や、ペントハウスや、換気筒や、子供の遊び場としての施設が、その建物全体を充分美しく彫刻的なものに見せるだろう。一方の円筒形の建物は、円筒形であるということだけでも隣の四角な建物との間に調和を保ち、それの持つスカイラインはこの平原の風景を美しく切るだろう。装飾は何も要らない。バルコニーが円

筒の周囲を渦のように巻くだけで充分だ。

箕原信次は彼が空間に描いている二つの建物から眼を離すと、さて駅はどっちの方角にあるだろうかと、頗る現実的な卑近な問題に突き当った。

箕原信次は低い小さい丘が波状に拡がっている平原に眼を当てた。そしてその広い平原に散らばっているマッチの棒のように見える何百本かの電柱を見渡していたが、やがて郊外電車の駅のある方向の見当を付けると、その方に向かって歩き出した。彼はいつもそうであるように自分の判断を信じた。駅はその方向になければならなかった。広い舗装道路を少し行って、右へ曲がり、次に左に折れた。箕原信次は自分の行手にやがて駅の建物が現われて来るであろうことを信じて疑わなかった。

それにしても——、と箕原信次はいま別れて来たばかりの女に思いを戻した。あの若い女は何者であろうか？　いかなるところへ勤め、いかなる生活を持っているのか。彼女を包んでいる生活の雰囲気は新しいというよりは古いと言った方が当っている。しかし、その古さも救い難い程のものではないようだ。彼女は自分を入れる新しい箱を提供されれば、充分近代人としての具えるべき要素を身にも心にも着けて来るだろう。

箕原信次は煙草を一本吸った。そしてかなり根もとまで吸って、それを靴で踏み潰した。駅の前であった。

箕原信次は郊外電車から渋谷の雑踏の中へ吐き出されると、東京駅乗車口行きのバスに乗った。丸の内にある会社へ帰るためである。バスはひどく混んでいた。春になって急に外出者が多くなり、混んでいるのは車内ばかりでなく、吊皮にぶら下がって見る街の舗道も、どこもかしこも雑踏を極めている。

箕原はバスに乗ると、いつもそうであるように、ビルというものは数えるほどで、あとは低い一階か二階の木造建がごみごみと並んでいる東京の街々を、多少の苦々しさで睨んでいた。日本は地震国なので外国並みの高層建築は無理であるとしても、この低い家屋がひとつ並びに建てられてある現状はなんとかならないものであろうかと思う。三百戸ぐらいを収容する建物をぽつんぽつんと建てれば、いかに広大な土地が節約され、そこにいかに広い緑地帯が生れるだろう。それには新しく都市計画をやり直さなければならないし、その実現は絶望的とさえ言えるが、もしそうした空想が許される日が来れば、東京は森の都になるだろう。東京湾を囲む広大な土地には青々と樹木が生い繁り、その緑の間からは十五、六階建ぐらいのいろいろな形を持った近代的な建物が適当な間隔を置いて顔を出している。ブラジルの新首都として、いま作られつつあるブラジリア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com